



# 学校だより

9月号

令和5年8月28日

～ まちのみんな ひとつになあれ ～



## 「安全対策」

学校長 後藤 直樹

連日の報道で、「体温に迫るほどの猛暑」「線状降水帯」という言葉も聞きなれてきました。また、台風の進路は、今まで理科の授業で教えていたものとは大きく様変わりし、沖縄を往復する動きには悪意さえ感じてしまいました。「これも自然からの警告？」そんなことを日々考えさせられた夏休みでした。休み前の職員室では、「今日は晴れたから、残念ながら外遊びは出来ないね。プールにも入れないかも？」少し前までは、笑い話にしていたような会話が真剣にされていました。逆に朝、空一面が雲に覆われていると、これなら休み時間に校庭で遊ばせることも、外での体育の授業も大丈夫そうだと、ほっとしました。運動会が11月以降、初冬の行事となる可能性も現実味を帯びてきました。

さて、7月の夏休み直前に「安全対策協議会」が開催されました。この会は他の区では「スクールゾーン対策協議会」として実施されているものです。しかし港南区ではかねてより、その目的を通学路の交通安全対策だけに絞らず、防犯対策にまで広げて話し合われてきました。警察と区役所、地域の方々、そして本校の保護者(校外委員)の皆様が力を合わせて、通学路の安全対策に取り組んでいます。私は冒頭のあいさつの中で、感謝の言葉と共に次のような話をしました。当日は高学年が「水辺の安全学習」として着衣水泳を実施したのですが、その学習そのものが、安全対策として、暑さ指数(WBGT)をにらみ熱中症の警戒をしながらの活動という皮肉なものとなっていました。子どもたちの安全を脅かす危険因子が、自然災害も含めると徐々に増えてきていることを実感しているという内容です。実際に夏休み早々には小学生の痛ましい水の事故もありました。今後も学校はアンテナをより高くし、家庭や地域と協力して、子どもたちの安全を守らなければならないと、気持ちを新たにしました。

子どもたち自身もまた、学校保健会議の取組の中で、校内での怪我を減らそうというテーマで活動しています。怪我が多く発生している場所を調べ、多い時間帯や怪我の状況をグラフにまとめるなどして、安全な学校生活を保健委員が分かりやすく提案していました。一生懸命に取り組む子どもたちの話を聞いていると、こんな思いになりました。私たち大人が今やるべきことは、この子たちの安全を守ることはもちろんですが、究極は地球の環境を真剣に考えることなのかもしれません。子どもたちの「未来」そのものを守るために。

